

「学び」そして「指導」を見直す視点に

埼玉県川口市立戸塚綾瀬小学校

上原 一良

教育現場の受け止め方は

「学習の見通しと振り返り」の重要性については、教育現場においても異を唱える者はいだらう。しかしながら、「教師誰しもが実践してきたこと」であり、その重要性が再確認されたものと捉えていないだらうか。

「本時のめあて」を唱和させる導入や「本時の到達点」を確認し、復習を促す宿題を課す終末をもって、「学習の見通しと振り返り」が図られているという認識が我々教師にはないだらうか。筆者はかつて中学生を対象とする調査で、教師の指導行動に対する「生徒と教師の認知間」には、量的・質的に差異が生じていることを明らかにした（注1）が、「学習の見通しと振り返り」についても、指導者が認知している程度には、学習者に指導や支援が認知されていないという現状がないか、検証する必要があるだらうか。

児童・生徒の学びを見直す視点に

本校の小さな取り組みを紹介し、児童・生徒の学びを見直す視点から考えてみよう。5年生の8時間で構成されたマット運動の指導である。

〔ナビゲーション機能で見通しを〕第1時において、インターハイ団体優勝チームの演技をまず視聴させ、自身が到達したい目標（付きたい力）を考えさせるヒントとしている。体育館の壁面には、技（運動）の系統表が用意され、どのようなステップを経て達成していくか、児童自身に構想させ、言語（内言）化することに取り組ませている。そして、終盤に試技を行うことにより、達成への意欲を強化し、各プロセスにおける課題や手だてに對する意識を高めている。

〔コネクション機能で関係性を〕第2時（7時においては、種々の補助的な運動（動き）

を取り入れ習熟を図るが、どう完成させたい技と関係性があるか、各段階において把握させるために、系統表で確認しながら練習を進める。その際、進歩を確認するための自己評価・相互評価を継続的に行っている。

〔リフレクション機能で振り返りを〕最終の第8時には、達成できたかどうかの評価とともに、自分自身の取り組み過程についても評価を求め、メタ認知を図っている。したがって、児童は「6年生では、こういう方法でこんな技に取り組みたい」と次学年への新たな見通しをもって学習を終えている。

カリキュラムマネジメントを

こうして考えると、「学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れる」には、高木展郎が提唱するように、「カリキュラムマネジメント」の発想が必要となることが明らかになる。「ゴールに至る学習で育成すべき能力と学力の形成過程のプロセスを明確にしておくこと」〔注2〕が指導者に求められているのである。高木展郎は、「これまでの授業は、学習活動からカリキュラム構成を行うことが行われてきた。そこからの転換を図るためには、カリキュラム構成を『付きたい力（目標）』↓評価規準↓（評価方法）↓学習活動・教材』に

することが求められる。」(注3)とも指摘している。

国語科における「読むこと」の指導で考えてみよう。従来、私たち国語科の教員は個々の学習材(一例をあげるならば『大造じいさんとガン』)をどう教えるか、という発想から指導過程を構想してこなかっただろうか。「育成すべき能力と評価規準」から構想し「学習活動・学習材」を構成しなければ、学習者が「読むこと」の学習に「見通しと振り返り」をもつことは困難である。こうした状況が、「国語(の読解)は何を学習しているのかわからない」という意識を学習者に生み出してきたのではなからうか。また、今回の改訂では、中学校の指導事項の中から「主題」という言葉がなくなっている点にも注目したい。指導者が考える主題へ学習者を導くのではなく、学習者自身が、登場人物の心情や行動をとらえたり、情景描写をとらえるということが、次に、そのことについて自分の考えをもつということにつながっていくというのを認知できる指導過程を構想しなければならぬ。

言語(運用)能力の育成へ

最後に、児童・生徒の「学習の見通しと振り返り」の基盤となる「言語(運用)能力の

育成」をどう図っていくべきか、日常的な取り組みについて3点述べておきたい。

〔ノート指導の充実を〕国語科の授業においても、ワークシート全盛であり、そこには本来学習者が試行錯誤を通して見いだしていくべき課題解決への過程がすでに提示されていないだろうか。指導者の計画通りに授業は進むこととなるが、ここからは見通しにもとづく発見はなされず、「自分の考えの形成」には至らないのではなからうか。自ら学習に取り組みするためのノート指導の復権・充実を図りたい。

〔書くことの日常化を〕メモ(ノート・日記・手帳等)、すなわち「書くこと」の日常化を深化させるための指導(戦略)をもう一度国語科が進める必要がある。「書くこと(メモ)」は「考えること」であり、「内省」を経て他者や社会との「関係性や体系」を認識していく極めて有効なツールである。書き込みがあふれる教科書・ノート・辞書が、「見通しと振り返り」の基盤となることを我々指導者が再評価する必要があるだろうか。

〔発信する機会の充実を〕「受信する↓熟考・評価する↓発信する」という一連のプロセスの重要性が説かれ、多くの実践と検証がなされているが、児童・生徒が「発信する」機会の充実にさらに取り組む必要がないだろ

うか。「私のオススメの一冊(書評)」に取り組んだならば、学級における交流はもろろんのこと、図書室に掲示(ポップを作成)することであり、コンクールへ応募することである。こうした学習成果を積極的に発信する取り組みを継続的に行うことが、学習の振り返りを深化させ、自尊心を育み、学習意欲を向上させていくのではないだろうか。

今日求められているのは、指導方法を常に「評価」し「見直し」を図ることができる教師ではないだろうか。その真摯な実践を、学習者の「学習の見通しと振り返り」に結実させていきたい。

注

- 1 日本教育心理学会第30回総会発表論文集(pp.582-583)
- 2 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編『「読解力」とは何か』(三省堂、二〇〇六、pp.32-37)
- 3 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編『「読解力」とは何かPart II』(三省堂、二〇〇七、pp.14-19)

うえはら かずよし 埼玉県川口市立戸塚綾瀬小学校長「児童一人一人のself-esteemを高め、地域に愛される学校」を目指し、全教科・領域で言語活動の充実に取り組んでいます。